

土佐家粉本の

人麿像と和歌神をめぐって

岩間 香

粉本は制作や鑑定の参考にするために、絵師の手元に保存された下絵や模写の類をいう。本画と同様に絵師の作風や図様の参考になるものであるが、また粉本ならではの情報を含み、貴重な資料となっている。すなわち粉本には年紀や絵の依頼者、取次(仲介者)の書き込みがあり、制作年代、制作背景や支持層を、時には本画よりも詳細に知ることができるのである。本稿では「土佐家粉本」のうちから、整理の完了した人麿像と和歌神を取り上げ、書き込みから得られたいくつかの新しい知見を示しておきたい。

一 光起と光成

最初に取り上げる「人麿像」(二六)は、「元禄三年午十二月中旬 大坂手嶋十左衛門へノ中尊 両側伊勢小町 是ハ将監左兵衛」という書き込みをもつものである。従来土佐家の絵師の通称としては源左衛門(光則)と左衛門(光起)の名が伝えられているが、左兵衛の名は知られていない。しかし元禄三年(一六九〇)という年紀と左近衛将監という官位にあったことから、左兵衛が土佐光成であることは疑いなくであろう。同じく「人麿像」(五)も「土佐左兵衛」という署名がみられることから、これも光成の作に比定できる。そしてこの場合、官位を記していないことから、制作時期は将監に叙せられる延宝九年(一六八一)以前の若年期である可能性が高い。「土佐家粉本」にはこの他にも「土佐久翌像」(肖三)⁽¹⁾に「土佐源左衛門」の署名があり、また「衣通姫像」(五〇)には「土佐吉丞」の署名がみられる。こうした通称は本画には使用せず、土佐家の中で使用する粉本に限って用いられたことを思わせる。

光起は延宝九年に剃髪して常昭と称し絵所預を光成に譲ったが、その後も盛んに作画を行った。光起、光成父子はそれぞれ独自に制作する一方で、分業や合作もかなり行っていた。「土佐家粉本」の中では延宝六年の光成筆「玉津島明神図」(五七)が光起筆「住吉明神図」(粉本は失われている)と対幅であったことが知られる。現在、大阪市立博物館に所蔵される光起筆「住吉明神図」はその図様を偲ばせてくれるものである。また本画では東京国立博物館蔵「秋郊鳴鶉図」が光起、光成父子の合作としてつとに知られている。さらに先述の光起筆「人麿像」(二六)と近年、売

立目録に掲載された光成筆「人麿像」⁽²⁾、石山寺蔵光起筆「紫式部像」と同寺蔵光成筆「紫式部像」は、図様がほとんど一致することから、光成が光起の粉本を利用していたことを思わせる。『古画備考』に「光成画人丸像ヲミル、極テ佳也、光起ト甲乙ナキ程也」とあるが、これは光起との協同制作や光起の粉本を踏襲することが多かった光成の作画をよく云い表したものと見えよう。

二 依頼者と取次

これらの粉本には依頼者と取次および本画に着賛した人物の名が記されているが、そのうち経歴の判明した人物を本論の最後に表で示した。その人名からはいくつかの新しい事実を指摘することができる。

まず注目されるのは禁裏や堂上方に出入りする禁裏諸役の人物が多いことである。彼らは禁裏絵所預の土佐家とは同格で昵懇の間柄であったことから、制作を依頼したり取次を行ったりしたものと考えられる。武家の板橋政郡が取次なしで直接依頼しているのも、女院御所付きという役目を通して土佐家とは知り合いであったことが推察される。

また学者や連歌師、俳諧師からの制作依頼が多くみられるのは、人麿や和歌神という画題から考えても当然のことであろう。また医者が存在が目をはくが、これは当時儒者や国学者の多くが経済的な理由から医者も兼業したことと無関係ではない。ただ肖像画の像主にも医者も多く見られ、土佐家の交際範囲には医業を営む者が多かったと思われる。そのためか土佐光孚(一七八〇〜一八五二)は禁裏医師の御蘭家からの養子であり、さらに次節で述べる光成の弟も針医師であった。

さらに人麿や和歌神という使用の限られた画題であるにもかかわらず、多くの町人が土佐家に絵を注文している。『京都御役所向大概覚書』に名が見える谷長右衛門、片岡半兵衛の他に、京の富商として知られる長崎屋、糸屋、大黒屋、桔梗屋などの屋号があり、これら一族であった可能性もある。富裕な町人の間で文芸が盛行し、土佐家の有力な支持層になっていたことが知られる。

取次をしている人物の中には、絵絹屋喜兵衛、表具師正堅、表具師六兵衛のように職を通じて土佐家に出入りしていたと思われる者が含まれている。こうして禁裏に近い人物や、出入りの業者の取次により、土佐派絵画を享受する人々はさまざまな階層に広まっていった。

三 了仙と惟中

ところで「土佐家粉本」の墨書の中に、従来あまり注目されていなかった土佐家

の縁者の名が見いだされる。元禄二年(一六八九)に光成の手がけた「衣通姫像」(五一)は取次として安川了仙の名を記す。この了仙は土佐家系図によれば光成の弟にあたり、針医師となって姓を安川と改め、備後福山の家人となったという。この了仙が取り次いでいるのが俳諧師として著名な岡西惟中である。

岡西惟中(一六三九〜一七一)は因州に生まれ、長じて岡山に住み、医学と歌学を学んだ。その後西山宗因に俳諧を学び、延宝六年(一六七八)には大坂に進出し、医業の傍ら談林随一の論客として俳論や評論活動を展開した。

了仙と惟中が知り合うきっかけとしては双方共に医者であること、惟中が青年時代を過ごした岡山と、了仙の任地である福山が地理的に近いことなどが考えられる。了仙の取次で依頼を受けた光成は、多くの場合粉本には注文者や取次の名前だけを書くのに対し、「岡西惟中ト被云歌学者儒学者也」「連歌師ノ由」とやや詳しく書き留めている。実弟の紹介であることが印象深かったのであろう。

この惟中は大坂を舞台に活躍した人物であるが、粉本にはこの他にも大坂関係の人物が多く登場する。延宝三年(一六七五)に制作された「衣通姫像」の取次として大坂の白井宗因の名が記されるのを皮切りに、壺井義知、「大坂手嶋十左衛門」、「大坂へ」などと記した例がある。また昨年紹介した「宗祇像」(肖一〇五)を依頼したのも大坂の連歌師井上秋香であった。その理由として大坂の経済的発展と、それに伴う文芸、とくに俳諧の隆盛を挙げることができる。人麿像は古くは連歌の席に掲げられたが、近世においては連俳の席に掲げられることもあったのではないだろうか。このことは大坂が談林俳諧の中心となった時期に、人麿像が盛んに依頼されていることから推測できる。

四 粉本と本画

最後にこれらの粉本と本画の関係をいくつかの例から考えてみたい。「人麿像」(二)は寛文八年(一六六八)に制作されたもので作風から光起の筆であると考えられるものである。その後「比通元文五 七月烏丸殿御好ニテ(略)」の書き込みが示すように元文五年(一七四〇)には曾孫の光芳が本画を制作した。この時の本画にあたると思われる「人麿像」が大正十五年(一九二六)の売立目録に掲載されている⁽³⁾。それには光芳の落款があり、粉本と同字句の賛が烏丸光栄の筆で記されている。すなわち、光芳が粉本に記した「烏丸殿」とは当時傑出した歌人として「今人麿」(『風のしがらみ』)と仰がれた烏丸光栄であることが明らかになるのである。また

一般に土佐派の絵画には年紀を記すことが少なく、この本画も年紀を欠いているが、粉本の年紀から元文五年の作であることが判明する。本画と粉本の情報を相互に補うことでより正確な位置づけができる好例といえよう。

つぎに「衣通姫像」(四七)は元禄十三年(一七〇〇)、同十六年、宝永二年(一七〇五)、同五年と四度にわたって本画が制作されている。このうち元禄十六年には呉服商の片岡半兵衛に小町像と組み合わせたものを、宝永二年には故実家の壺井義知に人麿像と組み合わせたものを制作している。同じ「衣通姫」の像を後者が礼拝対象の和歌神の像として依頼しているのに対し、前者は華やかな女性像の一つとして依頼している。注文者の趣味が自ずと表れていて興味ぶかい。さらに同図と図様の近似した、十四歳の落款をもつ光芳筆「衣通姫像」が売立目録に掲載されている⁽⁴⁾。光芳は祖父の光成、父の光祐を十一才で失い、このとき絵所預を継いで間もない時期であったが、伝来する数々の粉本が光芳の制作を助けたことと推測される。粉本が家を守るといふ役割を果たした例であるといえよう。

また鑑定にもたらされた絵の模写の中には「人麿像」(二一)と『美術研究』六六号に紹介された「人麿像」⁽⁵⁾、また「人麿像」(一〇)と『国華』一八六号に紹介された「人麿像」⁽⁶⁾のように図様は勿論のこと、賛の字配りや変体仮名の使い方に至るまで一致し、粉本の原画と非常に近い関係にあったと思われるものがある。図像伝写の資料になるとともに、土佐家における鑑定の研究のうえでも興味深い資料といえよう。

以上「土佐家粉本」の人麿と和歌神の絵から得たいくつかの知見を述べた。限られた画題ではあるが土佐家の活動や支持層の一端を垣間みることができたのではないだろうか。今後資料の整理が進むにつれ、さらに多くの事実や文化の諸相が明らかになると期待される。

(注)

- 1 本論中の作品名に付した番号のうち肖とあるものは「土佐派絵画資料目録(一)」の番号
- 2 『墨跡資料目録』五一号・思文閣美術・一九七五年
- 3 大正十五年(一九二六)の東京美術倶楽部売立目録
- 4 『墨跡資料目録』一九号・思文閣美術・一九六五年頃
- 5 白畑よし「人麿像の像容について」『美術研究』六六号・一九三七年
- 6 「古画人麿之像」『国華』一八六号・一九〇五年

(京都市立芸術大学非常勤講師)

表 人麿像・和歌神像の粉本に見る人名

名前	略伝	番号
宮家・公卿		
聖護院道晃	一六一二〜七九。後陽成天皇の子。一六二六年親王宣下。聖護院門跡。一六五八年照高院に隠棲。	一九
伏見宮邦永	一六七六〜一七二六。霊元天皇の猶子。一六九五年親王宣下。	四四
阿野公業	一六〇二〜八六。権大納言正二位に至る。	五七
烏丸光榮	一六八九〜一七四八。内大臣正二位にいたる。有職故実に通じ、また和歌に長じ「今人麿」と呼ばれた。	二
烏丸光胤	一七三一〜八〇。光榮の養嗣子。従二位大納言に至る。竹内式部の学説に拠り朝権の挽回を計ろうとした宝暦事件に連座し、一七六〇年幕府に止官される。	四二
鳳早実積	一六九二〜一七五三。前参議従二位に至る。祖父実種は香道、茶道に一派をなした。一七五二年出家。	四九
近衛家	五撰家の一。	一四
禁裏諸役・幕府扶持人		
中井正豊	一六八二〜一七三五。京都大工頭。主水と称す。	三九
井川善五郎	右馬寮下司。両替屋。(一六九一年「京都覚書」)	四一
伊藤権之丞	駕輿丁役。家具屋(大概)。	四七
里村昌程	一六一二〜八八。京都の人。幕府連歌師。	四三
学者・連歌師・俳諧師		
壺井義知	一六五七〜一七三五。通称安左衛門。大坂生。筒井白雲、伏原宣通に学ぶ。諸方に遊び、のち京に出て有職故実家として知られた。	四八
坂口立益	医師吉岡元周の師。(一七二三年「良医名鑑」)	二五
堀正朴	儒医。正意の孫、南湖の父。妻は木下順庵女。	四
白井宗因	大坂の医者、和学者。	三五・五一
安川了仙	針医師。土佐光成弟。光親、了仙と称した。氏を安川と改め、備後福山の家人となった。	五一
岡西惟中	一六九三〜一七一。俳諧師。医師。岡山住。西山宗因に俳諧を学び、一六七八年頃大坂に進出し、俳	

田辺希賢	一六五三〜一七三八。通称喜右衛門。伊達綱村儒員	五一
古筆了珉	代々古筆の鑑定を業とした古筆家の五代。	五四
池西言水	一六五〇〜一七二二。俳人。奈良の人。松江重頼の門人で談林風から蕉風に近づいた。	六〇
浅井周迪	医師浅井周伯の一統か。	二一
里村寿石	連歌師里村の一統か。	四九
武者		二二
板橋政郡	一六〇五〜六六。一六五六年、東福門院の女院御所付きとなり、一二五〇石を知行す。翌年従五位下志摩守に叙せられる。女院より宸筆の懐紙などを賜う。一六九七〜一七六一。瀧川一成の子。西城御小姓組に列し、五〇〇石を知行す。	一
植村泰郡	御書院番士、中川勝安(一六九八〜一七五三)か。	二
中主膳正	杉本道継、松平大和家中、奥州松平越前守、竹越山城守	四二
町人		略
谷長右衛門	正徳金銀の改鑄の際の京都金銀引替所(大概)	二二
片岡半兵衛	京都呉服所(大概)。	四七
伊丹屋喜兵衛、和泉屋新右衛門、大黒屋常順、桔梗屋六左衛門、糸屋如雲、長崎屋嘉平、植松屋伊兵衛、絵絹屋喜兵衛、表具師正堅、表具師六兵衛		略

「京都御役所向大概覚書」を「大概」と略す。着賛者は土佐家が制作した絵に限る。

(岩間 香作成)

